

---

# インフィニット・ストラトス (仮)

南斗水鳥拳

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス（仮）

### 【Nコード】

N4555R

### 【作者名】

南斗水鳥拳

### 【あらすじ】

思いつきでやってしまった…後悔も反省もしないが

感想書いていってください

## 紹介

自分は、文才がほとんどありません。そして更新速度がだいぶ遅いと思いますがどうかよろしくお願いします

続いてこの小説の事です。独自解釈、独自設定があるかも知れませんが、そして織斑一夏は、ほとんど空気です。

主人公の設定

マイケル・ウエステイン

千冬と束の幼馴染で束と一緒にISを創ったが世間一般的には、知られていない

ISを使えるがIS学園が造られるまで公表しなかった。

ある事件を境に行方不明だったが一夏が学園に来ると同時に姿を現した。

顔は、カッコイイと言えないが何故かモテる

## プロローグ的な物（前書き）

友達に小説を貸してしまって束ちゃんの話し方が分からないそして  
キャラを壊してしまうかもしれないかもしれないかもしれませんがよろしくお願  
い  
します

## プロローグ的な物

暗い部屋の中、二人の人間がいる

一人は、生体ポットの様な物の中におり胸に丸い何かが付いている（アイアンマンの主人公が付いているものに似ている）もう一人は生体ポットを操作しているようだ

「おひさだね。ねえねえ体の調子はどう？」

生体ポットから男が起きた

「ん〜、東ちゃん絶好調だよ」

男は背伸びをして答えた

「んうんう、ウソは言っていないみたいだね」

束の視線は下を向いていた。

此处で考えてみようこの男は、ついさっきまで生体ポットに入っていたのだ服を着ていないつまり裸と言う訳だ

「……………服、よこせ」

「東ちゃん」

「なあに、まーくん」

「俺が言つもの用意してくねる」

古の鉄の巨人（前書き）

文才の無さに絶望したorz

## 古の鉄の巨人

「おつかれー。それにしても良く考えたよねー」

「俺が考えた訳じゃない」

「本当なら、あの時俺は即死のはずだった」

マイケルは真面目な顔をして語り出した

山の何処かの中にある城

「マイケル・ウェスティン我々と一緒に来てもらおう」

回りに重火器を装備した軍人らしき人たちがいた。顔がわれないためか全員がマスクをつけている  
中には、IS等も混じっている

「こんなに大勢でパーティーでも始める気か？」

「貴様が大人しくしてくれれば穏便にすむ」

チツ、数が多いねーさてどうしようかな？

「嫌だと言ったら？」

すべての兵士と兵器が銃口を向けた。

「撃て」

その一言ですべての銃口が火を噴いき爆音が轟き煙が充満する

「撃ち方やめ」

充満する煙が晴れていきその中に紅い全身装甲<フル・スキン>の  
ISが姿を現した

「それが、貴様のISか」

マイケルがゆっくりと喋る

「そつだ、古の鉄の巨人名をA l t E i s e n R i e s e <ア  
ルトアイゼン・リーゼ>」

シールドバリアがあつて無いような機体に対戦車ミサイルの嵐…………酷くた

タイトルは関係ありません

シールドバリアがあつて無いような機体に対戦車ミサイルの嵐……酷くた  
いつたい何人んの敵を倒したのだろうか、見る限りではゆうに約百  
人、しかしその全ては歩兵ばかりISを見ると小破、中破、大破と  
ダメージが見られるがほとんどが健在だ。

「そろそろ、退いてくれるとありがたいんだが」

「……………」

「だんまりかよ」

マイケルは、アヴァランチクレイモアを展開した

「これでもくらいな」

ツドオオン

「ッ…クソ」

よし、今ので三分の一は削れた

「遠距離の武器は、左腕のだけだと思っていたが…」

「切り札は、最後まで残しておくものだぜ」

その時、敵が笑みを浮かべた

「何笑つてやが」「ズドオオン」「ツガハ」

な、何だ…！？T72だ…と…

「確か、切り札は取っておくものだったな」

何台ものT72が姿を現した

その全ての砲台がマイケルに放たれた

「がああああああ」

このままじゃ…ヤベエ

T72の砲撃が止むとそこに立っていたのは、顔の右上の装甲が壊れ血を流したマイケルが立っていた

「流石は全身装甲<フル・スキン>だ。満身創痍とは言え生きているのだからな」

マイケルのISが強制解除し膝たちの状態になる

「上からの命令だ。逆らう場合は殺せと…」

マイケルの前に立つとゆっくりと銃を突きつける  
そして一つの銃声が響いた

## キス（前書き）

ヤバイ、この前夜の11時ぐらいの時駅で電車を待っていたら此処に飛び込めば楽になるかなと考えてしまった

## キス

「まーくん、一度死んだんだ」

「もう少し言う事あるよね」

マイケルは、ため息をついて話し始めた

「ここからは、俺じゃなくてISのコアの”記憶”になる」

マイケルは胸のコアを指して言った

「記録じゃなくて”記憶”？」

「ああ、こいつと融合した時になんて言うか…”感情”の様なモノを感じたんだ。だから記憶って言ったんだ」

「んー、それが本当ならすごい事だよ」

「そうだな」

「えへへ、ねーねー、まーくん」

束は、とびっきりの笑顔ですり寄ってきた

「お、おい　んぐっ!？」

束は、キスをしてきた。

最初は、さわりぐらいのキスだったが束がだんだんと舌を絡めてきた

「んっ……んちゅ……んん……ちゅ、はぁ……」

キスが終わると束は、マイケルに抱きついた

「おかえり。まーくん」

「ただいま」

どうしてこうなった(前書き)

今回も駄文だorz文才が欲しい  
駄目な俺ですがどうかお願いします

どうしてこうなった

どうしてこうなった？

「社長、現実逃避は後にしてください」

そう言うと十人中十人が美人と答えそうな美女が書類の束をマイケルの前に置いた。

彼女の名前はメリンダ・ロウマイケルの秘書をしている

マイケルは、置かれた書類に目をどうし始めた

本当にどうしてこうなったんだろう？ん〜、ダメだ何度考えても分からない

「社長手が止まっています。まだまだ書類は残っていますので」

「はい」

この会社について少し説明しよう。

この会社は民間軍事会社だ表向きは真つ当な会社だが地下に巨大なISを開発するための施設がある・・・と言っても会社ではなく束の隠れ蓑になっている。

「や、やっと終わった」

書類仕事が終わわり背伸びをしているマイケルにメリンダが話しかける

「これよりフランスでデュノア社との会談がありますので」用意を

「いや、少し休まして」

そう言うと彼女は迫ってきて

「し・用・意・を」

と言って部屋から出ていった

「用意はこれ位で良いかな」

コンコン

ドアの叩く音が聞こえてきた

「どつぞ」

「失礼します」

メリンダがドアを開けた

「準備はできてる」

「外に車を手配してあります」

マイケルは彼女について行った

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4555r/>

---

インフィニット・ストラトス（仮）

2011年10月8日01時11分発行